玉野高あす創立記念式典

玉野高が今年、創立80周年を迎え4日に同校で記念式典が開かれる。備讃瀬戸を望む、丘の上の学びやからは、これまでに2万6281人が巣立った。地域を支える人材を育て、市民に愛された学校の、これまでの歩みと現在を紹介する。（角南邦彦）

玉野マリンホームのお花見会で演奏を披露する生徒＝今年4月

地域に愛され80年

桜が見ごろを迎えた4月上旬、老人保健施設・玉野マリンホーム（築港）が、利用者の笑い声に包まれた。春休みを利用して、生徒約130人が施設を訪問。吹奏楽演奏やバトン、ダンスのパフォーマンスなど、若さあふれる出し物を次々に披露した。会場には美術部制作の桜の絵が飾られ、茶道部は抹茶で接待。運動部各部の生徒はお年寄りに付き添い、話し相手になった。

生徒会が主催する同施設での「お花見会」は今年で23回目。「多くの人に支えてもらっての学校生活なので、自分たちもできることで地域を元気にしたい」。生徒会長の雨嶋光一郎さん(18)＝3年＝は、参加した生徒の気持ちを代弁する。

全国コンクールに向けて練習する放送部＝2017年7月

玉野高の代名詞ともいえる積極的なボランティア活動。生徒が夏祭り運営や観光客のおもてなしに活躍し、昨年の西日本豪雨では市内外の被災地に何度となく足を運んだ。一人一人が地域の課題に目を向けて、関わる姿勢は、先輩から後輩へ、脈々と受け継がれている良き伝統だ。

自分で考える人材育成

■□■

1939年4月。市制のスタートより1年早く、玉野高は日比町立日比高等女学校として産声を上げた。その2年後、旧制玉野中学が開校。校舎の整地には、生徒も参加して汗を流したという。

両校が統合し、「玉野高校」が誕生したのは戦後間もなくの49年。しばらくは日比高女の流れをくむ玉校舎、玉野中の宇野校舎と二つに分かれていたが、玉校舎での火災もあり、57年に校舎を統合。全生徒が一緒に学べるようになった。

「目標を持って努力する先輩の姿を見て、自分も頑張ろうと思った。生徒が互いに刺激し合って勉強していた」。同窓会長の水田忠和さん(61)＝77年卒、東紅陽台＝は、在校時を振り返る。地域を代表する進学校として、勉学に励む生徒が多く、卒業生は広く県内外で活躍する。

一方で、課外活動も盛んだ。軟式野球部、サッカー部、演劇部などが全国で活躍。最近では放送部が全国コンクールの常連だ。

■□■

少子化や学区の改編、市の人口減などもあり、現在の定員は普通科のみの1学年160人。400人を超えていたころに比べると、やや寂しさは否めないが、その分、生徒の目標や特性に応じたきめ細かな指導ができているという。

「生徒も先生も顔が見える関係なので、いい意味で遠慮がなくて温かな雰囲気」と雨嶋さん。岡山市など市外から通う生徒も少なくない。

今、学校が大切にしているのは、生徒が自分で考え、判断できる力を育てること。ボランティアや地域活動もその一環で、自身も卒業生の多田一也校長は「大切なのは、将来社会に出たときに活躍できること。生徒には地域の人とどんどん関わり、さまざまな体験をしてほしい。そのことが、生きる力、人間力につながるはず」と話す。これからも「熱く、温かく、いきいきと」をスローガンに、地に足をつけた人づくりを進め、地域とともに歩み続ける。

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。